

弱者の復讐



チンポを育てて
女を寝取れ!



寝取られ系R-18小説

弱者の復讐・チンポを育てて女を寝取れ！

（体験版）

目次

プロローグ

第一章 勇者・セックス

第二章 駆け出し冒険者・手コキ

第三章 中堅魔法使い・フェラ

第四章 道具屋・パイズリ

プロローグ

熱風が吹き荒れる砂漠の中を巨大な荷物を背負った小男が歩いている。その男の前には背の高い顔の整った男と、絶世の美女が二人。

（くそっ、くそっ、何で俺だけがこんな目に……）

ボビーという名の小男を含むこの四人はいわゆる勇者のパーティと言われるものであった。この世界を征服している魔王を討伐するべく、世界の希望を背負って日々戦っている。しかし、戦っているのは勇者エグバード、賢者ペルラ、剣鬼ゾッタの三人だけであり、小男のボビーは荷物持ちをしているだけであった。そのため、ボビーは勇者たち三人から時折侮蔑の目で見られることもある。そのことはわかっているのだが、三人に比べて力の劣るボビーにはどうすることもできない。

「おい、ボビー。遅れてるぞ。早くこい」

「へ、へい」

ボビーは震える足を奮い立たせて何とか前の三人に追いついた。

「私たちの荷物を盗もうとしたお前を生かしてやってるんだ。荷物持

ちへんはいはいつからやいな。そやめ、今いいで私の剣の錆になるか?」

「ひ、ひいっ！ それだけは勘弁を」

ゾッタの威嚇にボビーは簡単に震え上がる。勇者一行の中で一番血の多いゾッタはボビーをイジメて楽しんでいるようにもあった。

「もう、そんなボビーさんをイジメてはかわいそうですよ」

「へえ、それならペルラがボビーの面倒を見てやれよ。賢者様ならそのくらいの慈悲があってもいいんじゃないか？」

「そ、それはちょっと……」

賢者のペルラはボビーに同情するようなことを言ったが、本格的にボビーを助けるつもりはないようだ。中途半端なやさしさがゾッタ以上にボビーをイラつかせる。

（いつら、俺をイジメて楽しんでやがるんだ。くそっ、見た目は最高の女なのに、中身是最悪だな。これが勇者のパーティっていうんだから世も末だぜ）

そのパーティのリーダーである勇者はボビーのことなどまるでないかのように無視している。嫌っているというよりは、ボビーが初めからこの世に存在していないかのように無関心なのだ。そのため、ボビーは勇者に対してもいい感情を持っていなかった。

（ああ、逃げられるのなら今すぐ逃げ出したいぜ……）

しかし、ステータスからしてほかの三人と天と地の差があるボビーでは逃げることもすらかなわないだろう。結局、ボビーはこのまま勇者パーティの荷物持ちとして生きていくしかないのである。

その時、砂漠の下から大型のモンスターが現れた。サンドワームという砂の中に住むモンスターだ。

「うわあっ！」

ボビーはあまりの巨大さに腰を抜かした。勇者たちの荷物がその場に散乱する。しかし、勇者たち三人は驚きもせずささま戦闘態勢に入った。

「ペルラ、俺とゾッタに支援魔法を。ゾッタは口からの毒液に注意しながら牽制をしてくれ。トドメは俺が刺す」

「かしこまりました」

「わかったぜ」

エグバードの的確な指示により二人が動き出す。ペルラは魔法によりエグバードとゾッタに攻撃力、防御力、素早さを上昇させる支援魔法をかけた。ゾッタはその支援魔法で強化された身体で左右にフエイ

ントを入れながらサンドワームに近づいていく。サンドワームは口から毒液を吐くが、素早さを強化されたゾッタにはかすりもない。そしてゾッタがサンドワームの懷まで潜り込むと、強烈な一撃でサンドワームの腹を切り裂いた。

「今だぜ、エグバードっ！」

「おっっ！」

腹部を切り裂かれてもだえるサンドワームの頭上にエグバードが跳びあがっていた。そしてそのままエグバードの剣がサンドワームの頭を切り裂いていく。

サンドワームは醜い悲鳴を上げてそのまま動かなくなった。

（す、すげえ……）

ホビーはこの戦いを震えながら見守っていただけである。これでは三人から軽く扱われても仕方がないだろう。

「おっ、この戦いで私はレベルアップしたようだぜ」

「私もです」

「おおっ、俺もだ。ちょうどみんなのレベルアップが同じタイミングになったんだな」

エグバードたち三人はレベルアップしたのを機に懐からとある一枚のカードを取り出した。この世界でスキルカードと呼ばれるもので、レベルアップとともに発生するスキルポイントというものを使って能力を強化したり、特技などのスキルを習得するものである。これは認可を受けた冒険者なら誰でも手にえられるものだった。

「しかしもう私は大体のソードスキルは取得しちゃったんだよなあ。遊び半分に別の職業のスキルでも取得するか」

「もう。ダメですよ、ソッタ。私たちは魔王を倒す旅をしているんですから、貴重なスキルポイントを遊びで使ってはいけません」

「そうは言っけどよお。二人とも私と同じような状況だろう？ もう必要なスキルなんてほとんどないじゃないか」

「確かに今すぐには必要ないかもしれないが、戦闘中に必要になる場合や特殊な状況に追い込まれて使いたいスキルが出てくるかもしれない。一応レアアイテムの『スキルリセット』という一度取得したスキルをリセットしてスキルポイントに戻すアイテムもあるが、まあ、これは保険のようなものだ。スキルポイントが貴重であることには変わりない」

「へいへい、エグバードもヘルムマジメですね。わかりましたよ。」

無駄遣いはしませんよ」

「わかればいい」

ボビーは三人の会話をうらやましそうに聞いている。冒険者にすらなれなかったボビーはスキルカードを持っていない。いや、持っているとしてもまともに戦うこともできないボビーではレベルアップなどおぼつかなかっただろう。だからこそ盗人として生活していたのである、そんな日々の中勇者たちの荷物に手を出してしまったがためにこうして荷物持ちをしているのである。

「おい、ボビー。まだそんなところに突っ立ってたのかよ。早く荷物を拾っていつていじ。いつでもなぐしてたらただじゃおかねえぞ」

「へ、へいっへい」

ソッタの言葉にボビーはすべさみ砂の上に落ちてしまった荷物を拾い上げる。そんなボビーを待つこともなく、エグバードたちは次の目的地へと歩き出してしまった。

(こんな生活、いつまで続くんだよ……)

ボビーの苦悩はまだまだ続きそうだった。

第一章 勇者・セックス

砂漠の夜は冷える。三つのテントはエグバード、ペルラ、ゾッタの三人のためのテントであり、ボビーのためのテントは用意されていなかった。ボビーはいつでも不遇な見張りを任せられていたのである。

一見すぐに逃げるのができそうだが、勇者たち三人のうち誰かはボビーと一緒に見張りをしているので逃げることなど不可能であった。しかも今日の見張りの相手は三人の中で最も血の多いゾッタである。

「あゝ、今日についてねえな。こんなやつと見張りなんてよお

（それはこっちのセリフだよ、まったく）

愚痴を言いたいのはボビーのほうだったが、口に出した瞬間に殴られるのはわかっている。黙っているのが一番賢いやり方だった。

「昼間の戦闘で疲れてるしなあ、もうこのまま寝ちまおうかな

（おう、寝ろ寝ろ。一人のほうは何倍もマシだ）

「そっだな、寝るか。おう、ボビー。私が寝るからってサボるんじゃないぞ」

「わ、わかってますよ」

ソッタもそうだが、勇者たちは眠っていても異変があればすぐに起きることができた。そのくらい感覚を研ぎ澄ませてなければ今まで生き残ることはできなかったのだろう。だからこそ、ボビーが一人になったとしても逃げだすことができないのだ。

ソッタは眠そうにあぐらをして自分のテントに戻っていった。すぐにイビキが聞こえてきたので、本当に昼間の戦闘で疲れていたのだろう。

「まったく、いっつらは気楽でいいもんだぜ」

ボビーは誰にも聞かれていないと思い一人愚痴をこぼす。

しばらくしてボビーも眠くなってきた。今夜は何もなさそうなのでこのままいっそ眠ってしまおうかと思う。さすがのボビーも人間なのだ。少しは眠らないと死んでしまうだろう。

(少しだけ、少しだけなら……)

ボビーが目をつむる。砂漠の静けさが耳の奥に響いてくるようだった。

しかし、そんな静寂の中にかすかな湿った声が混じるように聞こえ

てきた。

「……？」

ボビーは片目を開けて一つのテントに視線をやった。それは勇者エグバードのテントであり、よく見ると湿った声とともにかすかに揺れてもいたのだ。

（勇者の野郎、今日もやってやがるのか）

ボビーは「クリ」と生唾を飲み込み、こっそりと勇者のテントに近づいていく。接近するとその湿った声の主がよくわかり、中で何をしているのかもはっきりと認識できるようになった。ボビーは慎重に、バしないように勇者のテントを覗き込んだ。

「あつ、あんっ！ 勇者さま……っ！ 気持ちいいですう……」

「ああ、俺もだ」

中にいたのは勇者エグバードと賢者ペルラだ。もちろん中で行われていたのは夜の営み、セックスである。

（いじり、毎晩のようにいじりあうぜ）

いじらないとは一度や二度ではない。エグバードの性欲は底なしなのか、毎晩のようにペルラだけでなくソリタも交互に抱いている。時に

は二人同時というところもあり、ペルラとビクタもエグバードのこの行為を容認しているのだろう。

「ペルラの膣内はやわらかくて気持ちいいな」

「そんなこと言われると、恥ずかしいです」

「褒めているんだ、恥ずかしいことはないわ」

エグバードとペルラは互いに向き合いながら抱き合っている。対面座位というものだ。時折キスを交えながら激しく愛し合う。ペルラのその大きなお尻がボビーの目の前で上下に揺れていた。

（だ、たまんねえ……）

ボビーはこうして毎日のように行われる勇者たちのセックスを覗いていた。こんなご褒美がなければやってはいけないう。ついにボビーは我慢できなくなり、その場でスポンを脱いでオナニーを始めた。

「勇者さま、もうイキそうです……っー」

「ううん、俺も出す」

勇者たちのセックスが激しくなると同時にボビーのオナニーも激しくなる。今オナニーを始めたばかりだというのに、早くも射精してしまう。今オナニーを始めたばかりだというのに、早くも射精してしまう。今オナニーを始めたばかりだというのに、早くも射精してしまう。

「あ、ああああんっ！」

(うっ、出るっ！)

三人は同時に達した。エグバードとペルラとの結合部からはドロドロとした濃い白濁液が流れ出る。それと比較してボビーの精液はまるで水のように薄いものだった。

「はああん……。勇者さま、今日も素敵でした……」

「今日はもうこれで寝られるか？」

「はい……」

エグバードとペルラは甘いピロートークを始めていた。ボビーは射精した恍惚感で頭が呆けている。そのため、背後に迫っていた恐ろしい影に気づけなかったのだ。

「おい」

「……っ！」

ボビーは頬に強烈な衝撃を受けた。ボビーの軽い体は簡単に吹き飛んでエグバードのテントの中へと突っ込んでいく。

「あがががが……」

「きゃあっ。な、なんですか……っ？」

「……ソツタか」

エグバードは突っ込んできたボビーを無視して、テントの外にいるソツタに目をやった。

「ああ、こいつがノゾキなんてやってやがるから一発殴ってやったぜ」「別に気づいていたんだが、まあ、殴ったならそれはそれでいいか」

「あが、あががが……」

ボビーは何本か歯が折れたようで、まともにしゃべることができない。エグバードの言葉からボビーのノゾキは最初からバシっていたようだ。しかし、エグバードから見ればボビーなど虫けらとすら思っていない。完全に無視していたのである。それをバシずにくっすり覗いていると思っていたボビーは何とも情けないことだろうか。

「しかしまあ、こいつのチンポ……」

ソツタは丸出しになっているボビーのペニスを見て鼻で笑った。エグバードの立派なペニスと比較するとまるで大人と子供のようである。いや、比較することすらエグバードに失礼だと思われた。

「短小、早漏、そして射精してもこの量かよ。男として終わってんな」

ソツタはボビーの身体だけでなく心も折に来る。ボビーも自分の性

能力が低いことはわかっていたのだが、こうして改めて言われると心に来るものがあった。しかも比較対象が男として完全無欠ともいえる勇者エグバードなのだからその惨めさは際限がない。

ボビーは逃げるようにしてエグバードのテントから出ていった。あのままその場にいたら羞恥心で死にたくなっていただろう。

「けっ、逃げ方まで小物だな。そのチンポの大きさにふさわしいぜ」「ふっ」

ゾッタの言葉が少し面白かったのか、柄にもなくエグバードは軽く笑った。

「そんなことより、お前たちのセックスの匂いを嗅いだら私まで興奮してきたじゃねえか。エグバード、責任取ってくれよ」

「ちょっとゾッタ。勇者さまは私とのセックスでお疲れになってるのよ」

「いや、構わない。ゾッタ、近くに来いよ」

「おっ、いいのか。やったぜ」

エグバードは一発ペルラの膣内に出しているというのにまだセックスができるようだった。一発出したらもう当分勃起できないボビーと

はそこも大違いである。

「それなら勇者さま、そのあとは私ともう一度……」

「おいおい、それなら私は二回はやってもらわねえと不公平だろう」

「今日は私の番なんですから、私のほうが多くなるのは当然です」

「いいや、ペルラは普段からセックスしすぎなんだよ。おとなしい顔

して頭の中はピンク色だよ。少しは自重しろ」

「ゾッタなんて獣のように品のないセックスばかりしてるではありま

せんか。もっと勇者さまのことも考えたセックスをですね」

ペルラとゾッタの言い争いは外にいるボビーにまで聞こえてきた。

喧嘩しているようだが、ただの勇者エグバードの取り合ひである。エ

グバードにとっては内心笑えて仕方がない光景だろう。

「いいさ、今日は二人が満足するまで付き合ってやる」

「いいのかよ。やったぜ」

「さすが勇者さまです。絶倫ですね」

容姿、強さ、そして夜の能力に至るまでボビーは勇者エグバードの

足元にも及ばない。

（ちひさし……）。俺はずっとこのまま惨めに生きぬいてかねえのかよ

……)

ペルラとゾッタの喘ぎ声は、それから朝方まで続いた。

翌日、勇者一行は砂漠の中にあるダンジョンに潜っていた。このダンジョンの奥には魔王を倒すために必要な貴重なアイテムが眠っている。

「おい、ボビー。また遅れてるぞ。早くしろっ！」

「へ、へへ」

ボビーはよろよろと勇者たち三人のあとを追っている。昨日ゾッタに殴られた影響でまだ身体がフラフラするのだ。しかし、そんなことを口にするばゾッタに自業自得だと言われるだけだろう。ボビーは何も反論できずに黙々と荷物持ちをするしかなかった。

「このダンジョンの奥にあるレアアイテムとは何でしょう？　魔王を倒すために必要なアイテムという話ですが」

「さあな。調べてみるまではわからない。しかもその情報が正しいかどうかも怪しいものだからな」

「なんでそんなあやふやな情報のためにこんなところまで来なくちゃ

いけなかったのを」

「念のためだ。間違っていたならそれでいい。しかし、もし本当に必要なアイテムなら手に入れておかなければいけないだろう」

「なるほど、さすが勇者さまです」

すでにエグバードたちなら魔王も倒せる實力はあるだろう。それでもエグバードはこういう噂を聞いては一つ一つ潰していきながら旅を続けているのだ。その強さに慢心することなく確実に魔王を倒すための旅をしている。まさに魔王討伐という点に関しては理想的な勇者だった。

「待て」

先頭を歩いていたエグバードが急に立ち止まった。ペルラとゾッタも気づいたように、すべて足を止める。

「落っこ穴か」

「ですわ」

古典的なトラップだが、引っかけばいいほど潜りぬかわからない。単純な罠ほど引っかけたときのダメージは大きいものだ。

「気を付けろよ」

「はい」

「こんな罥に引っかかるやついねえよ」

エグバードたち三人はするすると落とし穴をよけて前に進んでいく。

ボビーもそこはもとも盗人をやっていただけあり、前の三人が進んだところを見て罥をよけながら歩いた——はずだった。

「あれ？」

ボビーは昨日ゾツタに殴られたダメージが今来たのか、それとも荷物があまりのも重すぎたのかわからないが、落とし穴の間を歩いていくときに足元がふらついてしまった。当然、ボビーは思いっきり足を踏み外して落とし穴の罥を踏んでしまう。

17

「う、うわああああああっ！」

「ちっ、あのバカっ！」

すぐさまゾツタが落とし穴に飛び込んだが、それはボビーを助けるためではなかった。

「おっと、あぶねえ。大事な荷物が落ちるどころだったぜ」

「大丈夫ですか、私たちの荷物は」

「ああ、なんとかな」

ボビーが穴に落ちたというのにペルラとゾッタは荷物の心配ばかりしている。エグバードに至っては相変わらず関心が薄い。ボビーを心配している人物は一人もいなかった。

「あゝあ、荷物持ちがいなくなっちゃったぜ。どうするんだよ、これ」

「みんなで分担して持つしかないだろう。俺が少し多めに持つ」

「ったく。ボビーのやつ、本当に使えないやつだったな」

エグバードたちはすでにボビーは戻らないものだとして扱っていた。

それだけ落とし穴は深く、そしてどこまで続いているかわからなかった。普通に考えればこの穴に落ちて生きていられるはずはない。

ボビーの人生はここで終わってしまったかに思えた――。

「う、う……」

——しかし、奇跡的にもボビーは生きていた。どうやって助かったのかはわからないが、ボビーはほぼ無傷で最下層まで到達したのである。

「お、俺、生きてるのか……？」

辺りは真っ暗だ。ただ一つ、ポツリとそこだけ穴が開いたように光

が灯っていた。ボビーはその光に吸い寄せられるかのように近づいて行く。

「な、なんだ、こりゃあ」

そこにあったのは小さな宝箱だ。まだ誰にも開けられていない。

「まさか、これがあいつらの言っていたレアアイテムか？　ようやくあいつらと離れることができたんだ。このレアアイテムを奪ってから逃げて罰は当たらねえよな」

基本的にダンジョンで見つけた宝箱は早い者勝ちである。ボビーが最も早くこの宝箱を見つけたのだから、これはボビーのものと言ってよかった。

「さて、何が入ってるのかなあっと——うわっ！」

しかし、宝箱を開けるとそこから黒い煙のようなものが噴出した。ボビーは慌てて宝箱を捨てる。しかし、すでに宝箱は開いているのだ。黒い煙が止まることはない。

「へそっ、これもトラップかよ。どうして俺の人生はこんななんばっかりなんだ」

ボビーは泣きだくなった。つい先ほどまでは勇者パーティの荷物持

ち。落とし穴に落ちてからは帰り道もわからない。見つけた宝箱は偽物。自分が世界で一番不幸であるかのように感じられて仕方がなかった。

「せめて俺の人生、一つくらいいいことがあってもいいじゃねえかよっ！」

ボビーは誰に聞かせるでもなく叫んだ。

「ククク……、面白いことを言っやっだ」

「だ、誰だっ!？」

誰もいないと思ったのだが、いつの間にかボビーの近くに誰かがいたようだ。気づけば黒い煙もどこかに消えている。

「俺か？俺は、いわゆる悪魔ってやつだな」

姿を現したのは鋭い目つきに蝙蝠のような翼をもった悪魔だった。

魔王ほどではないが、この世界で大いに恐れられている存在である。

「あ、悪魔……っ!？」

ボビーはさらなる不幸に顔を引きつらせる。勇者エグバードたちがいるならまだしも、ボビー一人で悪魔と戦うことなどできない。これならまだ一人で暗闇の中に閉じ込められていたほうがだいぶマシだった。

た。

「そう恐れるな。俺はお前のように心がねじ曲がったやつは大好きだぞ」

「へ？ そ、それなら俺を見逃してくれるんですか？」

「いいや、ダメだね」

一縷の望みに賭けてみたのだが、やはりダメだったようだ。今度はボビーの人生はここで終わるかもしれない。

「しかし、封印を解いてくれたお礼だ。お前に面白いものをやろう」

そう言って悪魔はボビーに何かカードのようなものを投げてきた。

ボビーは悪魔からの攻撃かと思い両手で顔を隠して身構える。カードはボビーの足元に突き刺さった。

「だからそう恐れるな。それは武器ではない。スキルカードだ」

「す、スキルカード……？」

ボビーはおずおずと足元に刺さったカードを覗き込む。確かにそれは何も書かれていないスキルカードだった。しかし、普通のスキルカードの色は白色だが、このスキルカードは真っ黒である。少なくとも普通のスキルカードには見えなかった。

「それはお前のものだ。受け取れ」

「えっ？ い、いただけるの？」

「ああ。早く手に取れ」

悪魔に催促されては断れない。勇者一行といい、悪魔といい、そうしてボビーの周りに現れるやつらはこつも圧倒的な強者なのか。

ボビーは悪魔に言われた通りに黒いスキルカードを拾い上げた。すると、何も書かれていなかったスキルカードに次々とボビーのステータスが表示され始めた。初めて見る自分のステータスにボビーは興奮する。

「お、おおっ！ これが俺のステータスかよ」

しかし、何かがおかしい。通常あるはずの『力』や『素早さ』などがなく、なぜか『長さ』や『太さ』などの項目があるのだ。これは一体何のステータスなのか。

「あ、あのお、これって何のスキルカードなんですか？」

「人の欲望を最も反映するスキルカードだ」

「人の欲望……？」

ボビーの欲望に関係しつつ、『長さ』や『太さ』などに関係している

ものとするよ——。

「まさか、これって俺のチンポに関するステータスかっ!？」

「ククク……、そうだ。人の欲望とは肉欲のこと。三大欲求の一つでもある」

「はあ、それは別にいいんですけど、その、肝心のステータスが……」

名前 ボビー

長さ 6センチ

太さ(周径) 4センチ

精液量 Gランク(最低)

持続時間 Gランク(最低)

テクニック Gランク(最低)

魅力 Gランク(最低)

保有スキルポイント 0

「これって、どうなんですか?」

「まあ、ひどいもんだな。お前は男として最低クラスの生殖能力しか

ないということだ」

「や、やっぱり……」

わかってたことだったが、改めてこうしてステータスという形で表されると心に来るものがある。ボビーは大きいため息をついた。

「何を残念がっている。それはスキルカードだといっただろう。つまり、スキルポイントを使えばそれらの数値を上げることができるんだぞ」

「な、なるほどっ！……あつ、でも、俺、レベルアップなんてしてねえからスキルポイントなんて持ってねえや……」

ボビーは今まで困難に陥っても逃げて何とかしてきた人間だ。そんな人間がレベルアップなどできるはずがない。当然、スキルポイントものである。

「ククク……。案ずることはない。そのスキルカードには面白い機能が備わっている」

「お、面白い機能？」

「ああ、そのスキルカードは他人のスキルポイントでも使うことができるんだよ」

「お、おおっ！？」ということは、俺がレベルアップしなくてもスキルポイントを使い放題……っ！」

ボビーは先ほどまでとは打って変わって満面の笑みを浮かべて喜んでた。しかし、世の中そんなに甘くはない。

「もちろん、他人のスキルポイントを使う場合にはその人の意思でスキルポイントを使うことが前提だ。お前が自由に使えるわけではない」「で、ですよねえ……」

当然といえば当然である。悪魔からもらったスキルカードといえどもそこまで万能ではないのだ。

「それじゃあこんなスキルカードがあっても宝の持ち腐れですよ。俺なんか貴重なスキルポイントを分けてくれるようなやつ、誰もいませんって」

「そこは自分で何とかするんだな。だが、まあ、今のお前ではそれも難しいかもしれん。特別に俺から一つだけスキルポイントをやるっではないか」

「ええっー？、い、いいんですか？」

「今回だけだ。あとは自分で何とかするんだぜ」

「あ、ありがとうございますっ！」

悪魔がボビーに近づいてきて指でスキルカードに触ると、スキルカードのスキルポイントの数値が『0』から『1』へと変わった。

「オススメは魅力だな。長さや太さを多少増やしたところであまり意味はない。魅力ならお前のチンポを見せるだけで女が寄ってくることもあるかもしれないぞ」

「そ、そんなことが……」

「もちろん、魅力を一つ上げただけで寄ってくるような女はその程度の女ということだな」

「へへへ、それでも今のままじゃ女なんて触ることもできねえんだ。

どんな女だって寄ってきてくれるならうれいってんだぜ」

「そうか。それならいい」

ボビーは悪魔に言われた通りスキルカードの魅力のところに指でなぞってスキルポイントを使った。ボビーのチンポの魅力が『Gランク』から『Fランク』へと変化する。

「……これ、何か変わったんですかい？」

「見た目にはわからないものだ。だが、確実にお前のチンポは進化し

ていね」

「そ、そうですね……。へへへ……」

ボビーは今まで成長を実感したことがなかった。それがたとえチンポの成長だとしてもいつして成長できたというのは大きなことだった。

「うれしいか。それでは、そろそろ対価をもらおう」

「だ、対価……？」

「まさか、これだけのものをもらっておいて何もないとは思ってないだろう？」

「いや、それは……、その……」

封印を解いたお礼にスキルカードをもらったものだと思っていたボビーは狼狽する。しかし、よく考えれば相手は悪魔なのだ。何の対価もなくこれだけのものをもらえるはずもない。

「そ、それで、対価というのはいったい何びいびいまつものか……」

「何。簡単なものだ。お前、勇者エグバードとその一行を知ってるな？」

「へっ？。それは、まあ、はい」

「そいつらを潰せ。方法は問わない」

「は、はあああああっ？。いや、何を言ってるんですかー？。無

理ですよ、相手は勇者ですよっ！？」 いや、エグバードだけじゃなく、賢者ペルラも剣鬼ゾッタも俺なんかが敵うわけじゃないじゃないですか」「普通にやったらそうだろう。だからこそそのスキルカードを渡したのだ」

「ええ……。こんなチンポを強化するだけのスキルカードでどうしろと……」

「あとはお前で考えろ。期限は勇者たちが魔王城へとたどり着くまでだ。もし達成できなければ、その時はお前の命をいただく」

「ひ、ひいっ！」

この悪魔ならば本当にそれくらいのことにはやってのけるだろう。ボビーは悪魔との契約でチャンスと同時にピンチにも陥ってしまったのだ。

「近くの町までは送り届けてやろう。さあ、もう行け。次に会うときは勇者たちを潰したときか、それともお前の命を奪いに来たときだ」
「……」

悪魔の体中から黒い煙が噴き出す。思わずボビーが目をつむると、次に気づいたときはダンジョンの外だった。太陽が燦燦と照り付けて

いる。

一瞬あれは夢だったのではないかと思ったが、今も手にある黒いスキルカードが『あれは現実だった』と語りかけている。

「どどどすりゃいいんだ……」

ボビーはその場で頭を抱えてうずくまってしまった。

第二章 駆け出し冒険者・手コキ

ボビーはひとまず近くの町へと避難した。砂漠の真ん中で立ち止まっているとどんなモンスターに襲われるかわかったものではない。何をするにもまずは身の安全を確保することだった。

「な、何とか生きてたどり着いたか」

しかし、これからどうすればいいかわからない。勇者エグバードたちを潰せというが、正攻法で倒せるわけもない。かといって悪魔からもらった黒いスキルカードはボビーのペニスを強化するだけで戦闘能力の項目は一切ないのだ。これではどうやって勇者を潰せばいいかわからなかった。

「このままじゃ、俺は悪魔に殺される……。いや、エグバードたちを潰そうとしていることを本人たちに知られてもダメだ。どうすりゃいいんだよ、俺は……」

何もわからないボビーだったが、ダンジョンと砂漠を歩いてきた疲労でもう眠気が限界だった。

「うひゃあえず、寝よう」

ボビーは人目につかない裏路地に行くと、まるで倒れるようにして眠ってしまった。宿屋など無一文のボビーが使えるわけもない。ボビーはこうして人目も気にせず道端で寝るしかなかったのだ。

しばらく眠っていると、何か股間のあたりがムズムズして落ち着かない。ボビーはまだ眠い目をこすりゆっくると起き上がった。

「あっ」

「あっ」

見ると、なぜか駆け出し冒険者らしき女の子がボビーのペニスを握っていた。駆け出し冒険者はすべさずその手を放す。

「す、すみませんっー」

放しはしたものの、駆け出し冒険者はチラチラとまだボビーのペニスを盗み見ている。これでバレないと思っているのだろうか。

（なんだあ、この女。まさか、痴女か？）

痴女にしては慣れていない様子だった。痴女だとしたらまだ駆け出しの痴女なのだろう。

ボビーは素直に聞いてみることにした。

「お前、痴女か」

「ち、違いますっ!」

しかし、先ほどまでボビーのペニスを握っていたのは確かなのだ。

その言葉はあまりにも説得力がない。

「私がクエストから戻ってくると、あなたがここで寝ている姿が見え
たんです。浮浪者かと思って近づかないようにしてたんですけど、視
界の端にあなたの股間のものが目に入った瞬間、なぜかフワフワとあ
なたに近づいて行ってしまっただけのこと……」

「ああ。まあ、俺は寝相が悪いからな。しかもこんなボロボロの服じ
ゃ寝てるときにチンポがはみ出すこともあるだろうよ」

それはいい。しかし、ボビーのチンポを見て近づいてきたというこ
とはやはりこの女は痴女なのではないか。少なくとも痴女の素質があ
るのではないだろうか。ボビーはそう思った。

（いや、待てよ。もしかしたら……）

ボビーは懷から例のスキルカードを取り出した。ほぼすべての項目
でボビーのペニスは最低の数値。しかし、あの悪魔からもらったスキ
ルポイントで『魅力』の項目だけFランクにアップしていたのだ。ま

さか、この効果がこの駆け出し冒険者にあつたのではないか。

（確かめてみるか）

ボビーはわざと駆け出し冒険者に見せつけるようにペニスを曝け出した。

「ああ……」

駆け出し冒険者は魅了されたように恍惚とした表情でボビーのペニスを見つめている。

「このペニス、触りたいか？」

「えっ！？ いや、その……。は、はい……」

（この反応、まず間違いなさだろっ）

ボビーはニヤリとほくそ笑んだ。

「そうか。それじゃあ触らせて——」

（いや、待てよ。もしかしたら——）

ボビーは少し考え込んだ。このままこの駆け出し冒険者にペニスをこじがせるのも悪くない。しかし、それではそいつで終わらである。今後この駆け出し冒険者といろいろできるかもしれないが、ボビーには悪魔から課された使命があつた。そいつのんびりとしてもいられない

のだ。そして、その使命を遂行できるかもしれない方法を、今思いついた。

「おい、お前、名前は」

「わ、私ですか？ マリー……。マリーといいます」

「そうか、マリー。お前、冒険者だよな」

「はい。まだ駆け出しですけど」

「ってことは、レベルアップしてスキルポイントを持っていたりするの
か？」

「えっ？ はい。ちょうど今日のクエストでモンスターを倒してレベルアップしてきたというので、1ポイントですけど、持ってます」

「そうか、それはいい」

ボビーは思惑通りだと低く笑う。駆け出し冒険者であるマリーはなぜボビーが笑っているのかわからず、それよりも早くボビーのペニスを触りたいと思いそわそわしていた。

「マリー、俺のペニスを触りたいというけどだが、条件がある」

「条件？ 私、お金は持ってませんよ」

「金じゃねえ。いや、金もできればほしいところなんだが、今はそれはいい。お前のスキルポイントをくれ」

「スキルポイント？ でも、スキルポイントって人にあげられるものではないですけど……」

「それは俺のスキルカードがあれば大丈夫だ。それで、スキルポイントをくれるのか？ くないのか？ もしくれば俺のチンポは触り放題だよ」

「えっ、そ、それは……」

『冒険者にとってスキルポイントというものは非常に貴重なものである。それがなければ冒険者として成長はできず、レベルの高いクエストも受けることはできない。駆け出し冒険者ならなおさらスキルポイントが必要だよ。』

迷っているマリーにトドメを刺すべく、ボビーは自身のペニスを大きく揺らした。

「ほっわ、いれに触りたいんじゃないのか？」

「あ、ああ……」

ボビーのペニスに魅了されたマリーは正常な判断ができない。こん

な短かなペニスであっても、性知識のないマリイにとってはとても興味深い魅力的なペニスに見えてしまっているのだ。

「もしこのチンポに触りたいのならこのスキルカードに触ってスキルポイントを渡すことを頭に浮かべな。さあ、どうするんだ？」

「う、うう……」

マリイは迷っているようだったが、徐々にボビーの黒いスキルカードへと手が伸びていく。そしてついにマリイの指はボビーのスキルカードへと触れたのだった。

「私の、スキルポイントを、渡します」

マリイがそう口にした瞬間、ボビーのスキルカードにマリイのスキルポイントが譲渡された。

「へへへっ、じやいい。そうか、じややってスキルポイントを集めりゃいいんだな」

「そ、そんなじやより、もうあなたのそれ、触ってもいいですか？」

「ああ、好きなだけ触りな」

マリイはお預けを食らった犬が『よし』の合図を待っていたかのようになり、ボビーのペニスへと飛びついた。初めてペニスを触るのか、興味

深そうにボビーのペニスを観察している。

「じ、これが男の人のおチンポ……」

「へへへっ、丁寧に扱えよ。デリケートな部分なんだからな」

「は、はい」

マリーはボビーに言われた通り、貴重なものを触るかのようにペニスを扱う。まだ慣れていないその手つきがボビーをむずがゆくさせていた。

「おい、どうせだから俺のチンポをじじいてっねよ」

「じじい……っはっ」

「手」キだよ、手」キ。そんなことも知らねえのかっ」

「え、えっと……。はい、すみません」

「俺のペニスを握って上下に動かすんだ。強く握るなよ。やめっへ、

丁寧だ」

「は、はい。じじい、かなっ」

マリーは不慣れな様子で手」キを始める。何とも拙い手淫だったが、それでも弱小チンポであるボビーのペニスにとっては十分な刺激だった。

「い、いいじゃねえか」

「そうですか？　ありがとうございます。でも、これって何の意味があるんですか？」

「今にわかるよ。もっとその上下運動のスピードを上げてみな」

「はっ」

マリーはボビーに言われた通り手「キ」のスピードを上げた。ボビーのペニスは小さいのでマリーの手——ほぼ親指と人差し指だけ——は楽に動かすことができる。だからこそ性経験の乏しいマリーでもなんとか形になっているようだった。

「うん……。で、ON……っ！」

「出て、何が——きゃあっ！」

びゅんぶんっ！

ボビーはマリーの手「キ」で射精した。しかし、その精液の勢いも量も少なく、水のように薄いものだった。性経験の豊富な女性が見れば、こんな射精など鼻で笑ったことだろう。

しかし、マリーは違った。

「な、何、いわ……」

精液を初めて見るのか、興味深そうに自分の手に付着した液体をいじっている。

「へへへっ、それが精液ってやつだよ。今のが射精だ」

「精液……。射精……」

スキルカードで上昇させた魅力の効果なのか、こんな水のような精液でもマリィは興奮した様子で眺めている。この調子ならマリィからもっとスキルポイントを集めることができるかもしれない。

「なあ、マリィ。今度はお前が気持ちよくなってみないか？」

「えっ？ わ、私が？」

「ああ。男はこうしてチンポをいじられると気持ちよくなって射精するんだが、女も同じように気持ちよくなることができるんだぜ」

「そ、そんなことができるんですか？」

「ああ、俺が気持ちよくしてやってもいいんだが……」

ボビーの意味深な言葉にマリィは生唾を飲み込む。かなり興味を持っているようだ。

「お、お願いします」

「へへへっ……。それじゃあ、ちょっと待ってな」

ボビーは例のスキルカードを取り出すと、マリーからもらったスキルポイントでとある項目をランクアップさせた。その項目とは、『テクニック』だった。Gランクだったボビーのテクニックは「ランクへとアップする。

「よし、いいぜ。それじゃあ、まずはそのおっぱいでも揉ませてもらおうかな」

「お、おっぱいですかっ！？　そんなに気持ちよくなるんですっしょうか」

「俺を信じな」

ボビーはまだむき出しのペニスをびらんと揺らしてマリーの思考を奪う。マリーはペニスに魅了されてボビーの言いなりになってしまった。

「まずはその防具と服を脱いでおっぱいを出してもらおうか」

「は、はい……」

マリーはボビーの言う通りにその形のいいおっぱいを曝け出した。

「くへへへっ、っ、それじゃあ……、くだきますか」

「えっ！？」

ボビーは荒々しくマリィのおっぱいを揉みしだく。テクニックがアップしたといっても、それは最低フックの『G』から『F』に上がっただけだ。まだ一般的に見ればボビーの性技術は下手な部類であろう。しかし、性経験のないマリィに対してはそれでも十分だったのである。

「なんだか、変な気分……」

「それが気持ちいいってやつだぜ。もっと味わいな」

ボビーはおっぱいを揉みながら片手をマリィの股間のほうへと伸ばしていった。そして不意打ちのようにマリィのマンコへと指を突き入れる。

「ああんっー」

マリィは稲妻に打たれたように身体を震わせた。まったく予想していなかった場所への刺激に、マリィの脳は快感でいっぱいになる。

「へへへっ、びっだ。気持ちいいだろっっ」

「は、はい……。なんか、胸の奥が熱くなる感じがします……」

「もっと気持ちよへへっしてやることもできるんだが——」

ボビーは急にマリィから手を放し、距離をとった。あまりに突然な

じつにマリーは茫然とする。その火照った身体の熱はどうすることもできず、潤んだ瞳でボビーを見つめることしかできなかった。

「あ、あつ……」

「へへへっ……。最後までしてほしかったら、さっきみたいにスキルポイントを持ってきた。そうすれば今以上に気持ちいいことをしてやるぜ」

「そ、そんな……。スキルポイントはレベルアップしたときにしか手に入れない貴重なもので……」

「そんなことはわかってんだよ。それで、あつするんだっ」

「へ、へっ……」

これはボビーにとっても賭けだった。もしこの作戦がうまくいかなかったら、スキルポイントを集める方法がなくなってしまう。しかし、うまくいけば自分の力を使わずにスキルポイントを集めることができるのだ。これほどおいしい作戦はない。

「わ、わかり、ました。また、スキルポイントを持ってきます」
(やったぜ)

ボビーは内心大笑いした。

「それじゃあまた明日だ。俺はこの時間にここにいるから、それまでにレベルアップしてスキルポイントを集めてくるんだな」

「は、はい……」

マリーは熱い吐息を漏らしながら夜の街の中へと消えていく。それをボビーはにやけた顔をしながら見送った。

（そうか、そういうことだったのか。やっとわかったぜ、このスキルカードの使い方が）

黒いスキルカードを使えばボビーのペニスを強化することができる。その強化したペニスで女を堕としていき、スキルポイントを集めてさらにペニスを強化する。こうしていけばボビーのペニスは際限なく男らしくなるだろう。そして、その強化されたペニスで勇者のパーティの一員であるペルラとゾッタを堕とす。それだけでも十分戦力の削減になるだろう。

（しかしせっかくだ。あのいけ好かないエグバードの野郎にも一泡吹かせてやる。いや、どん底にまで突き落としてやるよ）

ボビーは堪え切れず、一人不気味に笑うのだった。

翌日、日が落ちてからボビーが昨日と同じ場所で待っていると、防具をボロボロにしたマリーが現れた。すでにその顔はほのかに赤くなっており、早くもボビーとの性行為を期待しているのが見て取れた。

「や、約束通り、スキルポイントを持ってきました」

「へへへっ、やるじゃねえか。その様子だと相当がんばったみたいだな」

「はい。3ポイント、あります」

つまり一日でレベルを3つも上げたということだ。駆け出し冒険者であるので比較的水平は上がりやすいという点ではあるが、それでも驚異的なレベルアップの速度である。相当無理をしたということだ。

「ようっ、うっそ。全部よいせ」

「は、はい」

多少は戸惑ったかと思っただ、どうやらマリーはもう発情していて限界のようだ。早くボビーに気持ちいいことをしてもらいたくて仕方がないらしい。素直にボビーのスキルカードに指を置いてスキルポイントを譲渡する。

「へへへっ、いいじゃないか。しつぽうなでんきもふいになったぜ」

今すぐスキルポイントを使うというつもりもできたが、どうせならじつぱうと考えてどの項目をスキルアップさせるか考えたかった。

（まあ、まずは目の前のマリーに褒美を与えてやるか）

「昨日の続きだ。まずは防具と服を脱ぎな」

「は、はい……っー」

マリーはついにこの褒美がもらえると云わんばかりに急いで防具と服を脱ぎだした。夜の街に上半身裸の女性が立つことになる。

「それじゃあ、いただきますっ」

「あんっー」

ボビーはマリーの後ろから胸を揉みしだいた。乳首を中心にぐるぐる回すように胸をぐるぐる、マリーの顔は見る見るうちに赤く染まっ
てっっ。

マリーのおっぱいは小ぶりだが、形がいい。成長すればもっと
おっぱいになるんじゃないかなと想像してた。

「気持ちよそっだな。それなら、こっちもっっっ」

ボビーは股間と同じように片手をマリーの股間へと伸ばしてっっ。

マリーは拒否することなく、ボビーの伸ばした手を受け入れた。

「それっ、いいっ！」

「へへへっ、そうだったっ？」

ボビーはまずマリーのクリトリスを触ってみた。まだ手探り状態で探るような荒々しい手つきだったが、それでもマリーには十分な刺激だったようだ。

「俺のテクニックで女がよがってやる。なんて気持ちがいいんだっ！」

今まで底辺は這いずり回ってきたボビーにとって、自分が主導権を握るという快感は何とも言えない悦楽だった。確かに金で買った女を抱いたことはあったが、それでもここまで女を喜ばせたことはない。それもそのはずで、ボビーは黒いスキルカードがなければ今も最底辺のセックス下手な男のままだったのだから。

「このままイかせてやってもいいが、こいつにはお礼も兼ねてもっと気持ちよくしてやるか」

ボビーは一度マリーから手を放し、黒いスキルカードを取り出した。マリーから譲渡された3ポイントのうち、1ポイントを使って再び『テ

クリニック』の項目を強化する。フランクからフランクとフランクアシ
プした。

「まあ、いれどいれくらゐ変わるかな」

ボビーは片手でおっぱいを責めつつ、もう片方の手の指をマリーの
マンコに突き入れた

「はっっー！」

マリーは身体をのけぞらせて快感を享受する。

「おおっ、わかる。わかる。いじがっつなっつと、いじをいじっ
て擦ると気持ちがいいんだっつー」

「あっ、あっ、あああっっー」

マリーはボビーの問いに答えられないほどよがっていた。しかし、

その反応がボビーへの答えとなる。ボビーからしたらそれだけで十分
だった。

「も、もう、ダメ……。何か、来そう……」

「ううむ。そむが『ーへ』っつじやない」

「ーへ……」

「いへときは、大きな声で言っただけ」

ボビーはそう言っていてダメージを刺すようにおっぱいと膣内を責めた。
た。

「い、イくううううううううううっ！」

夜の街にマリーの声が響き渡る。この声でボビーたちが何をしているのか気づいた人たちもいることだろう。

「へへへっ、ぶっだ。気持ちよかっただろうっ？」

「はあ、はあ、はあ……。さ、最高、でした……」

マリーはあまりの気持ちよさに気を失ってしまった。

「へへへっ、こんなヒロイんことをしてスキルポイントを集められるなんて最高じゃねえか。よし、この調子で俺のチンポを強化して、最強のチンポにしてやるぜ。そしてあのむかつくペルラとゾッタ、そしてエグバードを……」

ボビーは今後のことを思い不気味に笑う。ボビーの頭の中ではエグバードたちへの復讐の道が開かれたようだった。

第三章 中堅魔法使い・フェラ

「きよ、今日もスキルポイントを持ってきました……」

「へへへっ、よくやった。褒美をやるから、股を開きな」

ボビーが黒いスキルカードを手に入れてから数日が経った。今日もマリーに無茶なレベルアップをさせてそのスキルポイントを奪っていたのだが、さすがに何日も連続してレベルが上がるわけもない。初日は3ポイントあったスキルポイントも、今日は1ポイントしか手に入れることができなかった。

（さすがにこれ以上いつでスキルポイントを手に入れるのは無理か。死なれても困るし、新しい奴隷を手に入れないといけねえな）

ボビーはマリーのマンコをいじりながら考え込む。この数日で上昇したボビーのセックスステータスは以下の通りであった。

名前 ボビー

長さ 6センチ

太さ（周径） 4センチ

精液量 Gランク(最低)

持続時間 Fランク

テクニック Eランク

魅力 Cランク

保有スキルポイント 1

とりあえず魅力を上げれば女は寄ってくる考えたボビーは集中して魅力をランクアップさせていた。そのおかげで今のボビーのペニスは平均以上に魅力的に見えることだろう。しかし、その他のステータスはあまり変わっていないので、完全に見た目だけよくて中身が伴わないハリボテチンポである。いや、長さや太さは変わっていないのでハリボテにすらなっていないのかもしれない。

「おらっ、イけっー」

「イけっーイけっーイけっーイけっー」

マリーは人目もはからず絶頂を宣言した。この快感はオナニーでは手に入れないものなのであろう。

「はぁ、はぁ、はぁ……。あの、もっと私のアソ」をいじってもらえま

せんか……?」

「ああん? 今日は1ポイントしか持ってきてねえだろう。だったら手マンも一回だけだ」

「そ、そんな……。私、もうなかなかレベルが上がらなくなってきます。スキルポイント以外なら何でもしますんで、もっと私に快感をくださいっ!」

「だから、俺はスキルポイント以外はいらな——」

ボビーは言いかけた言葉を飲み込んだ。ここまでボビーに依存している女だ。スキルポイント以外にも使い道があるのではないだろうか。

「……おい、何でもすると言ったな」

「は、はい。スキルポイントはもつないですけど、それ以外なら……」

「それなら、スキルポイントを貯め込んでるような冒険者はいねえか。

女の冒険者だ。美人であればなおさらいい」

「美人でスキルポイントを貯め込んでいるような冒険者ですか……。

うん、私、冒険者になったばかりで他の冒険者のことはよくわからないんですよね」

「だったら聞き込みをしても調べてくるんだな。もし俺が満足する

ようなやつを見つけてきたら、そのときは存分に気持ちよくしてやる。もしかしたら今以上に気持ちのいいことができるかもしれないねえ。」

「ほ、本当ですかっ!?! 私、がんばりますっ!」

「ああ、せいぜいがんばね」

通常冒険者が行う情報収集もマリーのようなボビーのペニスに魅了された女にやらせればいい。黒いスキルカードは使い方次第で本当に何でもできる魔法の道具のようであった。

翌日、早くもマリーはボビーが気に入るような女冒険者を見つけてきた。

「名前はメリッサ。中堅の魔法使いです。レアな上級魔法を取得するためにスキルポイントを大量に集めているそうですよ」

「なるほど。で、そいつは美人なのか?」

「冒険者ギルド内ではトップクラスの美人です。メリッサさんがこの短期間で中堅までのし上がったのも、多くの男性冒険者のサポートがあったからという噂ですよ」

「なるほど。男を利用してのし上がってきた女か。そういう女を俺が

利用するの悪くねえ」

ボビーは今までさんざん強い男や女に利用されてきた男だった。そういう男が逆に強い女を利用する。立場を逆転させて復讐することもできるかもしれない。

「そのメリッサとかいう魔法使いのことは知らねえが、うっぶん晴らしにはちやうどいっせ。よし、その女にしよう。今から連れていけるか」

「やってみます」

マリーもボビーから与えられる快樂のためなら何でもする。すでに辺りは暗くなっているが、何かと理由をつけてボビーのもとに連れてくるのだらう。それはマリーに任せるしかない。

十数分後、ボビーのいる裏路地に不機嫌そうな女の声が響いてきた。「まったく、何で私があんたのクエストを手伝わないといけないのよ」「申し訳ありません。おれはたっぴりますのべ、べいかようっへお願いします」

「当然前よ。それに、レベルアップやスキルポーション以外にスキルポイントを得られるアイテムがあるっていう話、本当でしようね。も

し嘘だったらただじゃおかないわよ」

「は、はい。この目ではっきり見ましたから、それは本当です。今回のクエストもそれに関係しているので、そこは大丈夫かと」

「ふんっ。それならいいんだけど」

話し方からしてプライドの高い女なのだろう。しかし、それなりに気品はありそうだった。

「それで、こっちにいるのかしら？ そのしアアイテムを奪った盗人は」

「そうだと思います。目撃情報はこのあたりに集中していますから」

「そこまでわかってるなら自分でやらなさいよ」

「いえ、私のような駆け出し冒険者では勝てるか不安で……」

「まあ、あんたみたい駆け出し冒険者がいるおかげで私たちのような中堅がいい思いできるんだけどね」

どうやらマリーは盗人討伐のクエストを手伝ってもらったという名目でメリッサをここまで連れてきたようだ。あながち間違ってもいないのでボビーも苦笑を禁じ得ない。

（それならそれらしく振舞ってやるか）

ボビーは気合を入れてメリッサたちの前に躍り出た。

「おっと。お前たち、ここは通行止めた。通りたければ金を置いてきな」

「……はあ?」

ボビーとしてはそれっぽく振舞ったつもりなのだが、なぜかメリッサは気の抜けた声を出す。悲鳴をあげたり戦闘態勢に入るわけでもない。

「ちょっとマリー。まさか、これが例のレアアイテムを持ってるって盗人なの?」

「そ、そのはずです」

「はあ……。こんなザ、私が出るまでもないじゃない。レベル1の駆け出し冒険者でも倒せるわよ」

メリッサに馬鹿になれて、さすがのボビーもむっとした。この女は自分の立場をとことんわからせないといけないようだ。

「おいおい、そんなこと言っているのか? 俺はお前のようなやつを待ってたんだよ」

「何? 私を襲ってレイプでもするつもり? お生憎様、私はあんな

みたいなザ」にレイプされるほど弱くないわよ」

「確かに戦闘では俺はお前に敵わないだろうよ。でも、こっちのほうはどうだろうなあ?」

ボビーは自らのペニスを外気にさらす。小さい包莖ペニスがメリッサの前に曝け出された。

「ぷっ。何それ。そんなチンポを自慢げに出すなんて。あんだ、よっぽどのバカなんじゃ——」

ボビーのペニスを煽っていたメリッサの言葉が次第に小さくなっていく。なぜか視線がボビーのペニスから離れなかった。

(魅力のランクでどうかと思ったが、どうやら何とかかなりそつだ。この女、大した性経験もないようだが。それがアタとなったな)

言い寄ってくる男は多いという話だったので、男は利用してその都度捨てていたのだろう。そのツケが今になって現れたとも言える。

「へへへっ、べつした。さっきまでの威勢はどっに行っただ?」

「な、何でもないわよっ! それよりも、あんだが目的の盗人なんだから倒させてもらっわ。私の魔法なら一撃よ」

「いいのか? 俺を倒しちゃつとこのチンポを味わえなくなるぞ」

「そ、そんなものいらな——」

メリッサは会話の途中なのにまだしても呆けたようにボビーのペニ
スを見つめている。完全にペニスに魅了されている顔だった。

「無理するな。お前の言う通り俺とお前の実力差は明白だ。その気にな
れば俺は一瞬でやられるじゃだろっつよ」

「そ、その通りよ」

「だからよお。だったら今すぐ倒す必要もねえんじゃねえか？ この
チンポに興味があるんだろっ？ これを存分に味わってから俺を倒す
なり逃げるなりすればいいじゃねえか。お前にはそれだけの実力があ
るんだから」

「……」

メリッサは考え込んでいる。いや、考え込んでいる『フコ』をつけてい
る。メリッサの視線はずっとボビーのペニスに釘付けた。答えはもう
決まっているはずなのに、すぐに返事をしてしまったのがつついてい
るようではしたない。そんな打算的な思考がメリッサの行動にブレー
キをかけていた。

「ぐっした。考えるじゃねえだろっつ。ほねほね」

ボビーは無防備にもメリッサに近づいていく。いや、魔法使いであるメリッサからすれば、ボビーを倒そうとすれば距離などほとんど関係ないだろう。しかし、メリッサは魔法を放つ気配も見せずにただボビーの接近を許していた。

そして、ついにボビーはメリッサに手が届くくらいにまで近づいた。

「ほら、触ってみろよ」

「……っ！」

ボビーは無理やりメリッサの手を自分のペニスにあてがった。メリッサは抵抗している形を作ったが、それはあまりにも弱々しく、抵抗の意思はほとんど見られない。

「な、何するのよ」

「どうだ？　触ってみると結構いいものだろう」

「……」

ボビーのペニスは小さくてもいいものとは言えない。しかし、黒いスキルカードのおかげで魅力が増大しているために、それでもメリッサには素晴らしいもののように感じてしまうのだ。

「だ、大したことないわね。こんな短小チンポ」

「そうかよ。それならしょうがねえ。おい、マリー」

「はっ」

マリーはボビーに呼ばれてとんとんと近づいて行った。その様子にメリッサは自分は騙されていたのだと気づく。

「あんた、最初からそっちの仲間だったのね」

「いっ、ごめんなさい。でも、しょうがなっただです。だって——」

マリーはボビーのペニスを握って愛おしそうにこいこい。

「このおチンポの魅力には敵わなかったんですから」

マリーが熱心にボビーのペニスをこく様子を見て、メリッサは生唾を飲み込む。同性のマリーがこんなになるほどあのペニスはすごいのだろうかという考えがメリッサの思考の隙間に入り込んだ。

「ねえ、ボビーさん。お願いですから、私に精液をくたやろ」

「へへへっ……。そねでもいいが、その魔法使いが優先だ。おい、本当にこのチンポいらねえのか？　いらねえならこの女にやっちゃまっぞ」

「な、何を……」

これが最後のチャンスとばかりにボビーはメリッサに自分のペニスを誇張する。メリッサにはその短小ペニスがこの世で最も愛しいものを

のように見えた。

「す、少しだけなら、触ってあげてもいいわよ」

「へへへっ……。この期に及んでそのプライドの高い言葉が気に入らねえが、まあ、よしとしよう。いいぜ、触りな」

ボビーはマリーを押しつけ、ペニスをメリッサのほうに向けた。

「ああん、私のおチンポ」

ようやくボビーのペニスを触ることができると、メリッサの頬は紅潮した。目の前に来たボビーのペニスに、ゆっくりと、慎重に手を添える。ドクンドクンという血潮をその手のひらで感じ取った。

「こんな小さなチンポでも血が通ってるのね」

「当たり前だ。それで、どんな気分だっ」

「どんな気分って、別に……」

メリッサはプライドが邪魔して素直になれないが、その手はボビーのペニスを握って放さない。それがメリッサの心情を端的に表していた。

「じつせなら口にくわえてみたくなええかっ」

「いねえ、口っっ」

つまりフェラをしたくないかという点である。フェラはマリーですらまだしたことがない。だからこそマリーはボビーの言葉を聞いてやや不機嫌そうな顔をしたのだ。

「そんなこと、できるわけ……」

「ものは試した。やってみろよ」

「えっ、あっ、ちょっと」

ボビーは強引にメリッサをひざまずかせ、ペニスを顔に近づける。メリッサはボビーのペニスの臭いを直に嗅いでした。

「うっ、臭い……」

「確かにここ最近身体を洗ってねえからなあ。臭いは強烈だろっよ」

「不潔……。最低……」

「へへへっ……。それならどうしてすぐに顔を離さねえんだっ」

ボビーが指摘した通り、メリッサは臭いと言いながらもまだその臭いを嗅いでいた。本当に嫌悪感を抱いているならすぐに離れるか、少なくとも顔をそむけるはずだった。

「別に誰も見てねえんだ。俺もお前も、そこにいる女も同じであった。じつは誰にも話さねえよ。だからお前の好きなようにやればいいんだ。」

はれ、少しだけこのチンポを舐めてみな」

ボビーの言葉が毒のようにメリッサの心に沁み込んでくる。メリッサはその毒に抗うことができない。

「す、少しだけだからね……」

メリッサは舌をチロリと出してボビーのペニスの先を舐めてみた。しびれるような苦みがメリッサの舌先を刺激する。

「まずっー！」

「おいおい、ひでえやつだな。それに、本当にまずいだけか？」

「当然前でしよう。こんなチンポ、まずいだけで……」

メリッサはそう言うものの、再びボビーのペニスに舌先をつける。

「なっぴらまずい……」

「へへへっ……。その調いはむしろきもちい表情が緩んでるじゃねえか。

本当はそのまずさが癖になってしまってるんだろっぴ。」

「ぞ、そんなわけないでっぴっぴー」

「無理すぬぬ。今度ははくわえてもらいたいんだぜっ。」

「……」

メリッサはボビーの言う通りおずおずとペニスをくわえてみた。小

さな。ペニスがメリッサの口の中にすっぽり収まる。

「うん……。やっぱり、見た目通り小さいわね」

「ちっ、満足とはいかねえか」

「当たり前でしょう。こんな短小チンポをくわえたところで満足するわけないわ」

やはりペニスの魅力だけではここまでが限界のようだ。しかし、ここであきらめてしまえばこれ以上スキルポイントを集めることができない。では、どうするか。

（多少強引だが、やってみるか）

ボビーはあらかじめ考えていた策を試してみることにする。

「おい、これが何かわかるか?」

「何それ。黒い、スキルカード?」

「ああ、そつだ。こいつは普通のスキルカードとは違う。チンポの強さを表すスキルカードなんだ」

「な、何よ、それ……。そんなバカみたいなスキルカードがあるもんですか」

「証拠を見せてやるよ。今お前は、俺のチンポを短小だと言ったな?」

「ええ、そうよ。誰がどう見たって短小チンポじゃない」

「仮にだが、どのくらいの大きさならお前は満足するんだ？」

「えっ？ それは、その……」

まさかそんなことを聞かれると思っていなかったメリッサは動揺する。しかし、こじで答えないのもボビーに負けたような気がして嫌だった。妥協策としてメリッサが満足できるペニスの大きさを手で表した。

「11のくらいよ」

「へへへっ……。だいたい20センチくらいか？　ずいぶんでかいチンポが好きなんだな」

「へ、別にいいでしょうっ！　それよりも、私にこんなことを聞いてほしいのよ」

「そうだな。違いがはっきりわかるように俺のペニスを口の中に入れておけ」

「はあ？　また何で……」

「証拠を見せると言っただろう。ほね、早くころ」

メリッサは納得していないようだったが、興味はあるようで素直に

ボビーのペニスを再びくわえる。やはりメリッサが満足するには程遠い短小ペニスだった。

「それじゃあ、しっかり俺のチンポを感じてろよ」

ボビーは黒いスキルカードの『長さ』の項目に注目した。現在ボビーのペニスの長さは6センチ。そこにスキルポイントを使って長さを変化させたのだ。1ポイントを消費し、ボビーのペニスは1センチ長くなった。

「ん？ んんっ！？」

たった1センチだが、それでも口の中にくわえこんでいたメリッサにはボビーのペニスの変化がよくわかった。確かにボビーのペニスはこの一瞬で長くなったのだ。

「ぐっだ。長くなったろっっっ」

「……確かに変化したかもしれないけど、この程度じゃあまり変わらないわよ」

「そうだ。その通りだ」

ボビーはメリッサの言葉を肯定する。まさかそんなことを言われると思っていなかったのでメリッサは面を食らった。

「でもな、このスキルカードにはもう一つ秘密があるんだよ。それは、他人のスキルポイントでも俺のチンポを強化することができるってことだ」

「えっ？ それって——」

「ああ、そうだ。ところでお前、今スキルポイントはいくつ持ってるんだ？」

「……っ！」

ここにきてようやくメリッサはボビーの狙いがわかった。初めからボビーは金やメリッサの身体が目的ではなく、スキルポイントが欲しかったのだ。しかし、それがわかってでもメリッサはボビーのペニスの魅力から離れることができない。

「ぞ、それは……」

ここで保有スキルポイントを言ってしまうえばボビーに屈するようなものだ。メリッサは最後の抵抗としてそれだけは阻止しようと抗っている。しかし、それを無に帰すような行動をとる人物が一人——。

「メリッサさん、確かここにスキルカードをしまっていましたよね」

「えっ？ あ、ちよっぴー！」

隙を見てマリーがメリッサの懷からスキルカードを奪い取ってしまった。いつものメリッサならばこんなミスはするはずないのだが、やはりボビーのペニスに魅了されているというのが大きかったのだろう。

「よし、持っていこ。むむむむ……。おっ、いつ、20もスキルポイントを貯めてやがるじゃねえか。こんなに貯めてぶっするつもりなんだよ。ああ、そういえばシアな上級魔法を取得するつもりなんだっけか」

シアな魔法を取得するにはかなりのスキルポイントを必要とする。

この様子では最上級魔法でも取得するつもりだったのか。

「おい、お前。このスキルポイントを使って俺のペニスを強化してくれよ」

「な、何をバカなことを言ってるのよっ！ 貴重なスキルポイントをそんなことに使えるはずないでしょっ！」

「まあ、そうだな。でも、お前もこのままじゃ俺のチンポに満足できないだろっ。だから、少しだけ……。お前が満足する長さになるまでいいから、俺のチンポを強化してくれよ。そうすれば俺もお前も満足できるじゃねえか」

「す、少しだけ……」

「そうだ。少しだけだ。少しだけならまたすぐに貯めることができるさ。ここで我慢するよりも、少しだけ使って今快樂を得たほうが賢い使い方だと思うぜ? お前くらいの冒険者ならレベルアップ以外にもアイテムとかでスキルポイントを集めることができるんだろう? なんやでもなるわ」

「……」

普段のメリッサならばこんなボビーの讒言に惑わされることはなかっただろう。しかし、今のメリッサはボビーのペニスに魅了されている。このペニスでもっと気持ちよくなれるのならスキルポイントを少し使っくらいなんとも思わなかった。

「す、少しだけだからね」

「ああ、少しだけだ」

ボビーは思惑通りに事が運んで笑みをこぼす。

メリッサはボビーが差し出した黒いスキルカードに指を置いた。念ただけでスキルポイントが5ポイント移動する。たった5ポイントかと思うかもしれないが、マリーののような駆け出し冒険者から見れば

スキルポイントを一度に5ポイントも使うなんて贅沢にしか見えない。

「強化するのはチンポの長さでいいのか？」

「え、ええ」

「へへへっ、いいぜ。長さにスキルポイントを5個っと」

ボビーのペニスの長さが7センチから12センチへと変化する。さすがに5センチも長くなるとその変化は一目でわかるものだ。しかし、それでもようやく人並みの長さほどではあるが。

「ほれ、でかくなった俺のチンポだ。くわえてみろよ」

メリッサはボビーに命令されるのは納得いかなかったが、それでも欲望には抗えず、素直にボビーのペニスを口の中に入れた。先ほどよりも確実に長くなっている。ペニスにメリッサの口は歓喜する。その証拠に、先ほどまでより多くのよだねが垂れてきていた。

「じじじだっ。じいじで満足かっ」

「……確かにさっきよりは立派になってるみたいだけど、まだまだ足りないわね。この程度のチンポ、じいじでもめるわよ」

「だったらもう8ポイントよじいな。そうすればお前の欲望通りの20センチになるぜっ」

「そ、そんなにも渡せるわけじゃないでしょうっ!？ スキルポイントは貴重なのよ」

「へへへっ、よく考えてみろよ。確かにスキルポイントは貴重だが、20センチのペニスも貴重だと思わないか？ 今のお前は俺のペニスを自分の好きな形にできるんだぜ？ こんなチャンス、もう訪れないかもしれないぞ?。」

「……」

確かにボビーのもののように急速に変化するペニスというのはほかにないだろう。メリッサにも性欲というものはある。その性欲を満たすだけのペニスを、自分の手で作れるのだ。

「あと、8ポイントだけだからね」

「へへへっ、話がわかるじゃねえか」

メリッサは先ほどと同じようにスキルポイントをボビーに譲渡する。残りのスキルポイントは7ポイントになってしまったが、それでもあまり後悔はなかった。それよりも早く理想のペニスというものを見てみたいという欲望が勝っていたのだ。

ボビーはメリッサの要望通りペニスの長さを20センチにした。こ

ここまで来たらもう立派なペニスだろう。しかし、太さは変わっていないのでどうもひよろ長いやせ細ったペニスという感が否めない。

「おい、これじゃあ格好がつかねえだろう。残りのスキルポイント全部よこせ。太さも強化してやるよ。それで理想のペニスは完成だ」

「で、でも……」

「ここまで来たら最後までやるしかねえだろう?」

「……」

メリッサは黙ってスキルポイントを渡した。それはボビーのペニスに陥落した証拠でもあった。

「へへへっ……」

ボビーはペニスの太さを4センチから11センチへと増加させた。

これでようやく平均的なペニスの太さになったということになる。し

かし、長さは20センチもあるためかなりの威圧感があるだろう。

「どうだ、これで俺のペニスも立派になっただろう?」

「す、すいっ……」

さすがのメリッサもここまでペニスはなかなか見たことがない。

しかもこのペニスを作ったのは自分のスキルポイントなのだ。このペ

「ニスは自分のものだという執着が生まれてしまうのも仕方がない

」も、もちろん舐めていいのよね?」

「ああ、当然だ。舐めろ」

メリッサは先ほどまでとは打って変わって積極的にボビーのペニスを舐め始めた。もはや最初のころの逡巡などなかったかのようなのである。

チロチロと舌先で舐めていたメリッサだったが、我慢できなくなつたのか大きく口を開けてボビーのペニスを一気に口の中に入れた。

「ほ、ほほひい……（お、大きい……）」

先ほどまでは口の中にすっぽり収まっていたペニスなのに、わずかな間にメリッサの口では収まらないほど太く長くなった。これだけの凶悪なペニスならメリッサも十分満足できるだろう。

「へへへっ……。チンポがでかくなったからか、気持ちよさも大幅アップだぜ」

単純に小さいペニスと大きいペニスだと女性と接触する面積が大きく違う。それがボビーにとっても気持ちよさの違いとして現れた結果と言えた。

「よし、動きな

ボビーのペニスが巨大化した影響か、メリッサはかなり従順になってきている。まるでペニスの大きさが男としての強さの証であると理解しているようであった。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ。

「いーぜ。その調子だ」

メリッサがペニスをくわえたまま頭を前後に振ると、ボビーの腰も同じように前後に揺れた。まだ二人とも慣れていなくてタイミングが合わないこともあったが、どちらも性経験の浅いもの同士だ。それはそれでそれなりに楽しんでいるようである。

「うーぜ、おーっだ」

「ほ、ほーっー？（も、もっっーっ）」

「で、おーっ……っー」

びゅんぬんっー

ボビーはメリッサの口の中に精液を吐き出した。しかし、その量は少なく、水のように薄い。

「ぶはっ……。我慢のなさも精液の量も粗チンのままなのね」

「あ、ああ。そこはまだ強化してねえからな。でも、これからもっとい

「いチンポになると思うと興奮しねえか？」

「……」

メリッサは無言で答えた。否定しなかったということは肯定したのと同じようなものだ。すぐに魔法でボビーを倒したり逃げたりしないのがその証拠と言えよう。

「へへへっ……。俺に協力したらお前をもっと気持ちよへくするよ。

せっかく貴重なスキルポイントを全部つき込んだんだぜ？　自分の欲

望に素直にならなきゃ損や」

「それも、そう……。ね。いいわ。協力してあげな」

「やすが。話がわかるぜ」

「でも、私が満足できなかつたらどうすへん？　でも殺すから、覚悟しなな」

「へへへっ……。わかってるよ。怖い女だぜ」

「ううして、マリーに続いてメリッサもボビーの協力者となった。しかし、ボビーの目標はペニスを強化することではない。どこかにいる勇者パーティを壊滅させることが目的なのだ。これはそのための準備にすぎない。」

（この調子でいけば、今でも十分ペルラやゾリタをメロメロにできる

んじゃねえか？)

マリーやメリッサを攻略して、ボビーは少く寝心しておくらぬわ
であつた。

第四章 道具屋・パイズリ

ボビーがメリッサから大量のスキルポイントを奪ってから数日が経った。そのころ、勇者パーティがボビーのいる町にやってきた。もちろんエグバード、ペルラ、ゾッタの三人のことである。

(うげっ、本当にこの町にやってきやがった)

ボビーが落とし穴にはまって勇者パーティと別れたあのダンジョンからこの町が一番近いので当然と言えば当然であろう。補給や休息などこのことを考えると、この町に寄らないという選択肢はほばない。

今ならペルラやゾッタを進化したボビーのペニスで墮とせると思っていたのだが、今までのこともあり確信を持てない。次に三人に会うときは再びあの地獄のような荷物持ちに戻る可能性もあるということ。ボビーの心に影を落としていたのだ。

だが、このまま見逃すというのもいい手とは言えなかった。いつかは勇者パーティを壊滅させなければボビーは悪魔に殺されてしまうのだし、ここで見失ったらまたどこで見つけることができるかわからなかった。これはピンチであるとともにチャンスでもあったのだ。

(や、やるしかねえ……っ！)

ボビーは覚悟を決めてエグバードたちの前に躍り出た。

「ん？ お前は……」

「ど、どうも……」

以前のこととが身体にまでしみついているので、どうもオドオドとした態度になってしまふ。それも仕方がないことであつた。

「ああん？ なんだ、ボビーじゃねえか。お前、生きてたのかよ」

真っ先に近づいてきたのはいつもボビーをイジメていたゾッタだつた。

「な、何とか……。へへへっ……」

「だったら何ですぐに私たちのところに戻ってこなかったんだよ。お前がいないせいで誰がこんな重い荷物を持ってたと思つてんだ」

「す、すみません……」

もともと荷物のお大半はゾッタたちのものだ。それをボビーが持つ義理なんてまったくくない。以前も脅されてなければ逃げ出していたはずだ。

「まあ、戻ってきたならいいや。ほら、お前の仕事は荷物持ちだ。私だ

ちの荷物を持ちな

「へ、へ」

ソッタに続き、エグバードとペルラもボビーへと自分たちの荷物を持たせる。それが当然とばかりに誰も異議を唱えなかった。

「ちなみに、この町にはどのくらい滞在の予定で？」

「まあ、一週間くらいかな。ダンジョンに潜った疲れも取りたいし、つばらはめっけものももらだ」

「一週間……」

一週間もあればなんとかなるかもしれないとボビーは希望を持つ。ペルラかソッタも一週間で必ずどこかで隙を見せる。その隙について、進化したボビーのペニスで墮とすのだ。それができなければ、荷物持ちどころか命が危ない。

この一週間が、ボビーにとって運命の一週間になりそうだった。

エグバードたちは町の宿屋に泊まってめっけものを買った。しかし、ボビーがエグバードたちと同じ部屋に泊まれるはずもない。ボビーだけ一番安い物置小屋のような部屋に押し込められた。

(ちっ、やっぱりこういう扱いだよ)

しかし、今はそれがありがたかった。監視役がないのはボビーが自分で戻ってきたのを多少は信用しているということなのだろう。エグバードたちと一緒にの部屋にいては一人で行動できない。目的を果たすためにはどうしてもボビーは一人になる必要があったのだ。

ボビーは荷物を部屋に置くと、宿屋の構造を確認した。この宿屋には一つだけ風呂場がある。風呂場なので当然湯気を逃がすための窓も設置されていた。

「これだな」

ボビーは思い通りの場所に思い通りのものがあり、ニヤリと笑った。

夜になり、エグバードたちは順番に風呂場に入ることになる。

「私が一番でいいか?」

「はい。どうぞよ」

「俺は最後で構わない」

「サンキュー」

まずはゾッタが最初に風呂に入るようだ。それをボビーは風呂場の窓の外で待ち構えていた。

「やっぱり風呂は一番風呂だよなあ。……ん?」

真っ先に風呂に入ってきたゾッタだったが、すぐに風呂場の格子窓に何かがあることに気づく。棒のような何か。それはボビーのペニスだった。

(へへへっ……。さすがにマリーやメリッサのように真正面からチンポを見せて魅了されなかったら殺されるからな。いつやっつまずはどのくらい効果があるか確かめてやろうじゃねえか)

ボビーはぐいとなねばすべに逃げぬいじがでるよじに準備している。さすがのゾッタも、裸でボビーを追いつ回すようなことはしないだろう。

「なんだあ? あれは……」

ゾッタは目を細めながら格子窓へと近づいてきた。そしてそれがペニスだとわかると、明らかに不快な顔をする。

「うげっ、チンポじゃねえか。おいっ、変態だ。風呂場の窓の外に変態がいぬいっ」

(躊躇なしかよっ)

ボビーはまずいと思いつくまぬき逃げ出した。ペルソにも同じことを

しただが、ソッタと似たり寄ったりの反応である。ボビーのペニスではまだこの二人を魅了することはできないようだった。

（考えてみれば、エグバードの野郎のチンポはもっとでかかったな。

そんな巨根と毎日のようにセックスしてるあいつらだ。俺のペニスはまだまだ粗チンか）

比較対象が悪かった。勇者エグバードはペニスの性能も勇者なのだ。

そんな勇者に勝つためには、ボビーは勇者以上のペニスにならないければならぬ。

（マリーのレベルアップを待つのは時間がかかりすぎる。メリッサのスキルポイントはもうない。だったらどうすればいいんだ……？）

ボビーは早くもピンチに陥ったようだった。

「というわけだ。何とかならねえか？」

ボビーは宿屋の近くにマリーとメリッサを呼び出していた。

「うーん。私は駆け出し冒険者なので、これ以上何かできるようないとはないみたいなんですよね。すみません……」

マリーが申し訳なやうに深々と頭を下げる。

「メリッサのほうはどうだ？　とにかくスキルポイントが集まればいい。お前みたいにスキルポイントを大量に貯めてる女冒険者とか他にねえか？」

「そんな冒険者がそう簡単にいてたまるもんですか。スキルポイントをいっぱい持ってるとしたら、もう目的のスキルを取得してステータスも限界まで上げた超上級者くらいよ。そんな冒険者、世界に二、三人くらいしかいないんじゃない？」

その二、三人をボビーは知っている。やはりあの勇者たちは世界でもトップクラスの冒険者だったのだ。

「しかしなあ、あいつらからスキルポイントを奪うこともできねえし、何とかしねえと……」

「……別にスキルポイントが増えればいいのよね。」

「ああん？　まあ、そつだが……。何か心当たりがあるのか？」

「確実じゃないけど、あるわ。この町の道具屋は、スキルポイントを上昇させるレアアイテム——『スキルポーション』を取り扱ってるらしいのよ」

「へえ、そいつは初耳だ。なるほど、その道具屋から奪えばいいわけ

だな」

「盗むのは無理よ。そういうしアイテムは嚴重に保管されてるはずだから」

「だからってそれしか方法はねえんだ。やるしかねえだろう」

「もう少し話を聞いて。その道具屋の店主はね、若い女みたいなのよ」

「……ほう。美人か？」

「まあ、それなりにね。私には負けるけど」

プライドの高いメリッサが一応は美人と認めるのだ。期待はできるだろう。

「それに、胸が大きいらしいわよ」

「へへへっ……。そいつは楽しみだな。よし、その道具屋の店主を墮としてスキルポジションを全部いただいちまうか。それで俺のチンポも大幅強化だぜ」

「もちろん、情報料はいただくわよ。そのチンポで」

「わかってるよ」

「あの……。私も……」

「マリーは俺の役に立つまでおあずけだ」

「そ、そんなぁ……」

マリーは何とかしてボビーの役に立とうと必死に頭を悩ませる。こうしてボビーは飴ばかりでなく鞭も与えてペニスに魅了された女たちを操っているのだった。

「いらっしやませー」

ボビーはさっそくメリッサに紹介してもらった道具屋を訪ねてみた。小さい店だったが、小奇麗に整理されていて品の良さがうかがえる。

そして何より、店主の女性はボビーが満足するほどの美人だった。

（へへへっ、いっつは当たり前だぜ）

おっぱいもメリッサの情報通りかなりの巨乳だ。しかし、ボビーが店主の女性を品定めするのと同様に、店主の客であるボビーを品定めていたのである。

「あゝ、お客様……、ですか?」

「客以外に見えるのか?」

「えっと……、すみません」

確かにボビーの姿は小汚く、衣服もボロボロだ。浮浪者が紛れ込ん

だと言われたほうがしっくりくる。

「ここにスキルポーションがあると聞いたんだが、あるか？」

「確かにありますけど……」

女店主は明らかに逡巡している。完全にボビーを怪しんでいるようだった。このままではスキルポーションを見ることができない。だが、そこはボビーも考えていた。

「ああ、俺はただのお使いだ。ほら、この町に勇者のパーティが来て聞いてないか？　勇者の名前はエグバードって言うんだが」

「えっ！？　あの勇者さまのパーティの方ですかっ！？」

先ほどまでは打って変わって目を輝かしている。それほど勇者という名前には効果があるのだらう。

（今までさんざん利用されてきたんだ。名前を利用するくらいじゃっていっねえだらう）

あながち嘘でもないのだから信用性は高い。適当に勇者に関する話をすると、女店主はボビーを信用したようだった。

「俺はただの荷物持ちだな。もちろん、スキルポーションも俺じゃなくて勇者が使うんだよ」

「それでしたら——」

女店主は店の奥からスキルポイントを取り出しってくる。見本用として一本だけだが、どうやら本物のようだ。

「この店には全部でスキルポーションは何個あるんだ？」

「ここにあるものを含めて30本です」

スキルポーション一つで1ポイント得ることが出来る。とらとらとは全部飲めば30ポイント得ることが出来るということだった。

（やるしかねえ）

ボビーはこの女店主を墮としてすべてのスキルポイントを奪うことを決意した。

「とらとらで、あんだの名前はなんて言うんだ？」

「えっ？ ミミですけど、それが何か？」

「そうか、ミミ。ちょっとここを見てもらえるか？」

ボビーはいきなりズボンを脱ぎ、ペニスを曝け出した。あまりの行動にミミは悲鳴をあげる。

「きゃあっ！ な、何をしてるんですかっ！」

「何って、お前にチンポを見せてるんだよ。どうだ、立派なものだろ

ひっ。」

「は、早くしまっただけだわっ！」

「本当にしまっただけなのか。」

「……」

ミウは早くしまえと言っわりには横目でしっかりとボビーのペニスを
見つめていた。頬は紅潮し、息は荒くなる。明らかに興奮している
証だ。

ボビーは手ごたえを感じ、ミウに近づいてく。

「よく見てみるよ。こんなチンポ、めったに見ることはできねえぞ」

ボビーはカウンターの上に立ち、ミウの目の前に自慢のペニスを突
き出した。

「あっ」

ミウはそのペニスの威容に息をのむ。

「気になるなら、触ってもいいんだぜ。」

「ぞ、そんな……。それに、こんなところを人に見られたら勘違いさ
わっ！」

「その心配はねえよ。店の外に見張りを置いてきたからな」

「見張り?」

見張りとは、もちろんボビーからの褒美を期待しているマリーのこ
とだった。すでに店の扉に掲げられていた「OPEN」のプラークは
「CLOSE」へと裏返されている。

「とにかく人が入ってくる心配はねえってことさ。さあ、このチンポ
をどうしたい? 触るか、舐めるか、それとも、そのでっかいおっぱ
いで挟んでくれるのか?」

「な、何をバカなことを言ってるんですかっ! この胸はあなたのよ
うな人を喜ばせるためのものではないのですよ」

「へえ、そうかい。でも、俺はそのおっぱいでこのチンポを挟んでく
れたらうれしいんだがなあ」

「……」

ボビーはこれ見よがしにペニスを動かす。左右に動かしたペニスを
ミウの視線がしっかりと追う。

「試しに臭いでも嗅いでみるよ」

ボビーは不意打ちで自身のペニスをミウの鼻先に押し付けた。

「うっー」

ミウは思わずのけぞったが、すぐさまボビーのペニスの臭いが嗅げる位置に戻る。やはり興味はあるようだった。

「臭いですね」

「でも、癖になる臭いだろっ?」

「……」

ミウは否定しなかった。いや、否定できなかったのだろう。

「このチンポをそのおっぱいでこいてみたことはないか? こんなにまでかいチンポなんだぜ。きつとおっぱいも気持ちいいはずだ」

「そんな、チンポをおっぱいに挟んで気持ちよかったことなんてないですよ」

「へえ、すでに誰かので試したことがあるのか。で、そいつでは不満だったと」

「……っ!」

ミウは自分の失言に気づいて顔を真っ赤に染める。こんなことを言ってしまったのも、ボビーのペニスに翻弄されている証拠だった。

「俺のチンポはそんなやつチンポとは違っぜ。いいから試してみろよ」

「えっ、あっ、ちょっとっ!」

ボビーは無理やりミウの服を脱がすと、その巨大なおっぱいを曝け出させた。本来なら激しく抵抗されるはずなのだが、そこはペニスに魅了されていると確信しているのでボビーも大胆だった。

「ほらよう」

「あんっ!」

ボビーはペニスでミウのおっぱいを軽くつついた。それだけでミウは声を出してしまうほど感じてしまう。

「私、何で……」

「それは俺のチンポがすごいからだよ。ほら、もっと俺のチンポを感じてみよう」

ミウはまるで魔法にかかったかのようにボビーのペニスをおっぱいで包んでいく。ただそれだけなのに、ミウは官能的な幸福感を確実に感じていた。

「ああ……」

「いいぜ。動かしてみろ。やったことがあまるならわかるだろっ!」

「は、は……」

ミラはボビーの指示通りにパイズリを始める。本来ならパイズリで女性が性的興奮を覚えることはあまりないのだが、ボビーのペニスに魅了された状態のミラは、ただペニスに奉仕するという行為だけで幸せを感じているのだ。これがペニスに魅了されるということの恐ろしさである。

ズリユ、ズリユ、ズリユ。

経験者なだけあり、ミラのパイズリはこなれていた。しかし、巨大化したボビーのペニスはミラのおっぱいでは完全に包み込むことができず、先っぽが亀の頭のように飛び出していた。

「すいっ……。私のおっぱいでも包み切れないチンポがあるなんて…」

「感動しているところ悪いんだが、俺、もう出そうなんだわ」

「えっ？ もう出るのっ？！」

「悪いが今はまだ早漏なんだよ。うっ、出るっ！」

びゅるるっ！

ボビーは唐突に射精してしまった。しかもその量といい濃さといい、何とも男として情けないものである。これにはミラも失望した。

「へへへっ、そんな顔するな。確かに俺は見た目に反してチンポの性能はこんなもんだ。でもな、もしスキルポジションがあればもっとすごいもんになるんだぜ?。」

「えっ? 何で、スキルポジションが関係してくるんですか?。」

「それはな、これが関係してるんだよ」

ボビーはミラに黒いスキルカードを見せた。そこにはボビーのペニスの性能が細かく書かれている。

名前 ボビー

長さ 20センチ

太さ(周径) 11センチ

精液量 Gランク(最低)

持続時間 Fランク

テクニック Eランク

魅力 Cランク

保有スキルポイント 0

「何ですか、これ……。どこで見つけてきたんですかっ!？」

道具屋としてミラは珍しいアイテムに興奮している。確かに悪魔からもらったこの黒いスキルカードは超がつくほどのレアアイテムだろう。

「まあ、それは後で話すさ。それよりも、これは俺のチンポのステータスなんだよ。見ての通り、チンポのでかさや魅力はますますだが、それ以外がダメだ」

「そのようですな」

「しかし、このスキルカードを持っていれば、スキルポイントでこれらのステータスを上げる事ができるんだよ」

「まさか、それでスキルポーションを……」

「へへへっ、その通り啦」

「だ、ダメですよっ! スキルポーションはとても貴重なものです。

「一つだけでもこの店の商品を全部買えるくらいなんですからっ!」

「タダとは言わねえよ」

「えっ? お金を払ってくれるんですか?」

「いや、金じゃない。俺がお前にやるのは、いわれよ」

ボビーは再びミラの目の前にペニスを突き出す。これさえあればなんでも手に入ると言わんばかりだ。

「な、何をバカなことを……。そんなものでスキルポジションを渡すわけないじゃないですか」

「いいや、渡すね。お前が俺にスキルポジションを譲ってくれば、俺のチンポは大幅に強化される。それはお前をこのチンポで気持ちよくさせてやるってことだぜ？　そこまで火照った身体で、今から寝られるのかよ」

「……」

ボビーはミラの心の隙間を的確に衝いてきた。貴重なスキルポジションを渡すわけにはいかないという気持ちと、もっとボビーのペニスで気持ちよくなりたいという気持ちがせめぎ合う。しかし、いついつ場合に勝つのはより原始的な欲求のほうだった。

「条件があります」

「ほう、なんだ？」

「全部のスキルポジションを使うことはできません」

「へへへっ、そりゃそうか。いいぜ。お前が許す分だけでも十分だ」

「それと、強化するチンポのステータスは私が決めさせてください」
「なるほど。自分の好きなように俺のチンポを作り変えたいってことだな。まったく、こういうのも独占欲が強いって言うのかね」

ミウはあくまで自分が主導権を握ろうとした。しかし、それもボビーのペニスに魅了されている状態では怪しいところではあったが。

「まずは、そのスキルカードが本物かどうか確かめさせてもらいます」

ミウはまずスキルポーションを一本ボビーに差し出した。

「強化する項目は、『太さ』です」

「へへへっ、いいぜ。俺のチンポが太くなるところをじっくり見ときな。いや、触ってたほうがわかりやすいか?」

「そうですね。では……」

ミウは変化がわかりやすいようにボビーのペニスを軽く握った。これで本当にペニスが太くなればすぐにわかるだろう。

「じゃあ、いっせ」

ボビーはスキルポーションを飲み干すと、得たスキルポイントをペニスの『太さ』の強化に使った。一瞬でボビーのペニスは1センチ太くなる。

「ほ、本当に太くなったみたいです」

「へへへっ……。これでこのスキルカードが本物だってわかっただろうっ。で、お前はどの項目をどのくらい強化してくれるんだっ。」

「……」

ミラはボビーのスキルカードを見つめながら考える。ペニスの大きさに不満はない。あるとすれば射精に関する項目だろう。

「では、『精液量』をDランクまで。あと、『持続時間』もDランクまでお願いします」

「ってことは、全部で5ポイント必要だな。スキルポーションを5つよこすな」

ボビーの傲慢な態度が気に入らなかったが、ミラは素直にスキルポーションを店の奥から5つ持ってきた。ボビーはすべて5本のスキルポーションを飲み干すと、ミラが指定した通り『精液量』と『持続時間』をDランクまで上昇させる。

「これでようやく人並みってところか。ところで、本当にこれでいいのか？ いれじゃあただでかいだけの普通のチンポだ。お前が求めているのは、普通じゃないチンポじゃないのか？」

「わ、私は、別に……」

「だから素直になれよ。お前はもっと濃厚な精液を味わいたいんだろ
う？ そしてもっとチンポを味わっていたい。Dランクのペニスじゃ
そんなものは体験できないぞ」

「それなら、『精液量』にもう2ポイント……」

「お前も勝負が下手だねえ。そんな中途半端に上げてどうすんだよ。
そこまで来たらAランクまで上げとけよ。どうせ体験するなら最高の
体験をしたいだろっ？」

「最高の、体験……」

ミリアはゴクリと生唾を飲み込む。すでにボビーのペニスで欲求不満
のような状態にされているミリアにとって、最高のペニスで最高の体験
を試みたいという欲望は心の奥からぶつぶつと湧き上がってきてい
るのだ。

ミリアが店の奥から持ってきたスキルポーションは六本だった。

『『精液量』と『持続時間』を、Aランクまで』

「へへへっ……。それでいいんだよ」

ボビーはスキルポーションを飲み干してミリアに言われた通りに『精

液量』と『持続時間』をAランクまで上昇させる。これでボビーのペニスは『精液量』と『持続時間』に関してはトップクラスの能力を持ったことになった。

「よし、ご褒美だ。このチンポを存分に味わいな」

「は、はい」

ミミは先ほどのようにボビーのペニスをその大きなおっぱいで包み込んだ。やはり普通よりも大きいボビーのペニスはパイズリするほうもやりがいがあるらしく、ミミの表情は嬉々としていた。

「持続時間も強化したからな。今回はそう簡単に射精しねえぞ。満足するまでパイズリしな」

「は、はいっー」

ミミは先ほどの続きとばかりに熱心にパイズリをしている。もともと献身的な性格なのだろう。それにボビーのペニスに魅了されているという点もあり、パイズリしているだけでかなりの幸福感に満ち溢れていた。

「どうですか？ 気持ちいいですか？」

「ああ、いいぜ。しかもこんなにも気持ちいい感触を長い間楽しめる

ってのも最高だぜ」

ボビーは今までペニスを刺激されたらすぐに射精するほどの早漏だった。しかし、今は違う。『持続時間』はAランクの最高クラスなのだ。めったなことで暴発するというのはない。

「ミラ、ここまで来たんだ。もっと気持ちよくなろうぜ。俺のテクニックも最高まで上げてくれよ」

「そ、そんなことしたらまたスキルポジションが……」

「スキルポジションなんてめったに買う人がいねえじゃねえか。買う人がいないならそれはないと同じ。そんなあるかないかわからないよ。うなもののよりも、今を楽しむべきだろうっ……」

「あ、ああ……」

ミラも興奮で思考力が低下している。ボビーの言葉が戯言だとわかっているのに、それを否定する言葉が出てこない。

「面倒だ。もう残りのスキルポジション全部持ってきた。それが正しいスキルポジションの使い方ってもんだぜ」

「そう……。そうかも、しれませんが……」

ミラはボビーに言われた通り店の奥にあったスキルポジションをす

べて持ってきてしまった。

「へへへっ……。いいぜ。お前は正しい選択をした。その証拠を見せ
てやるよ」

ボビーはミウが持ってきたスキルポーションをすべて飲み干し、そのスキルポイントも余すことなく全部使い切った。その結果が次の通りである。

名前 ボビー

長さ 28センチ

太さ（周径） 16センチ

精液量 Aランク

持続時間 Aランク

テクニック Aランク

魅力 Aランク

保有スキルポイント 0

「へへへっ！ なんだ、いりや。こんなチンポ今まで見たことねえっ！

「こいつは女を墮とすためにある最強のチンポじゃねえかっ!」

「す、すいっ……」

ミラも最大級までに進化したボビーのペニスに見惚れている。こいつまでくるとこれ以上のペニスを持っている男はまずいないだろう。あの勇者エグバードですらこいつまでではない。

「これ、私のペニスなんですよねっ。」

「へへへっ……。今晚だけはそれでいいぜ。お前のおかげでこんなチンポを手に入れることができたんだ。一晩中相手してやるよ」

ボビーは先ほどの続きとばかりに巨大なペニスをミラのおっぱいに突き入れる。この時点でボビーのペニスはミラのおっぱいを突き抜け、その口先まで迫っていた。

「ああ、すいっ……」

「舐めな。パイズリしながらでもできるだろうっ。」

「は、はい……」

ボビーとミラの上下関係は完全に決まってしまった。もはやこのペニスを見て屈しない女はこの世にはいないと思えるほどだ。

ジュポッ、ジュポッ、ジュポッ。

ズリユ、ズリユ、ズリユ。

ミラはパイズリとフェラを同時に行う。ボビーに与える快感は倍以上になったはずなのに、それでもボビーのペニスは暴発しなかった。

「へへへっ……。すげえ。これなら本当に一晩でも二晩でも女の相手がでいいぜ」

「びはっ。でも、そろそろ精液が欲しいです……。全部飲み干しますから、出してくねませんか？」

「ああ、それもそうか。強化してからまだ射精してないもんな。試運転として一発出してみるか」

「あらがじいぢぢぢまほっー」

ミラはいじぢぢぢからにパイズリフェラの速度を上げる。ついにボビーの強化された精液を飲むことができると思っていると興奮してきたのだろっ。そんな献身的なミラを見ているだけでボビーのペニスにも血流が集まってきた。

「ううむ、イェーっー」

「はっ、来てっだわっー」

~~~~~



るるっ！

「ぷはっ！ 何、これ。溺れる……っ！」

「へへへっ！ なんだよ、これ。こいつはすげえっ！ 噴水のように精液があふれ出てくるぜっ！」

全部飲むと言ったミウだったが、大量の精液を飲み干せるわけもなく、代わりに全身が精液まみれになった。

「ふああ……。すげえやう……」

ミウもこの精液量には満足したのか、完全に放心状態になってしまった。しかし、こんなにも射精したというのにボビーはまだまだ満足していない。

「おいおい、一晩相手してくれるんだろう？ 夜はまだ長いんだ。俺が満足するまでへばるんじゃねえぞ」

「ふえ……っ。きゃあっ！」

ボビーはミウの上に馬乗りになると、再びパイズリを始めた。今日はいよいよミウの巨乳で遊ぶつもりなのだろう。

いついて、ボビーのペニスは最高レベルまで強化され、ペルラヤンツタを墮とすための準備は完了した。

「へへへっ……。待ってろよ、ペルラ、ソッタあ……。っー!」

あとがき

本作品の感想や誤字脱字の報告などは私の支援サイトである Ci-en  
までよろしくお願いします。( [https://ci-](https://ci-en.dlsite.com/creator/16754)

[en.dlsite.com/creator/16754](https://ci-en.dlsite.com/creator/16754))

今回は本作品の体験版を試し読みしていただいておりますが、いづれに  
ます。製品版のほうもよろしく願っています。

三日月燈